

Hagaŕta. sūli.^{*}

熊 本 裕

1. hagaŕta

敦煌，トアルファン出土の漢文以外のいわゆる胡語文献のうち，非仏典の俗文書の研究はようやく緒に着いたばかりといえる。その研究も現段階では個々の言語に限られていて，同時代同地域の様々な言語で記された資料を総合的に扱うことは，依然として将来の課題にとどまっている。しかしながら，中央アジアのオアシス都市ごとに，あるいはしばしば同一都市内において，種々の異なった言語が行なわれていた状況を想像してみれば，これらの言語間に相互影響があったということも当然考えられる。そのようなものの一例を例えば書簡の冒頭に用いられる様式化した文句に見ることができる。コータン語の書簡にはこの種の決り文句が何種類かあるが，その中でも部分的なヴァリエーションを伴って十点以上の写本に見出される次のような表現がある——ペリオ収集 P2027.5-6 KT 2.79 hāysye dīsa' vi naysdā grau aysmū jsa : maṛa śacū ḡnūnū ttāṣṭā janavai virāṣṭā⁽¹⁾ 「遠き地方に宛て，近く暖き心もて，当地沙州（=敦煌）よりはるか故郷へ」。この「遠き所に向かって近き心をもって」という対照表現は更に敦煌出土のソグド語書簡 Dokument XI (=Or 8212.89 =Ch.00286)⁽²⁾ の6行目に *ḡwr (z) [y] pnt m'ny* 「土地において遠く，心に

* 本稿は筆者の Ph.D. 論文 *Khotanese Official Documents in the Tenth Century A.D.* (University of Pennsylvania 1982) の170-172, 191-196, 286-287, 290-296頁をもとに，多少の加筆，訂正を加えたものである。

において近い」として現れ、また トゥルファン出土のウイグル語書簡にも ⁽³⁾iraq yertin y(a)qin kqūlin「遠き所より近き心をもって」として見出される。

以上のうち、コータン語文書はほぼ十世紀に属し、ソグド語、ウイグル話のものもこれとあまり遠くない時期のものと思われる。同一地域ではほぼ同時代におけるこのような複数言語にわたる表現の一致は偶然の結果とは思われず、相互間あるいはこれら以外の言語からの借用関係を想定せざるをえない。(上記ソグド語書簡について、吉田豊氏は、ウイグル人が不慣れたソグド語を用いて書いた可能性が高い、とする。)次にふれるのもこのような多言語にわたって現れる一致の一例である。

ペリオ収集コータン語写本 P2786 KT 2.93-101の冒頭から三分の二(全250行のうち1-165)の主要部分は、コータン王国の使節 Ana Saṃgai(安三戒?)が沙州で記した報告の下書の二つの異本(3-71, 85-165)である。沙州から甘州を経て中国本土に向かおうとする使節団は、折しも甘州ウイグル可汗の死に伴う政情不安から、コータン王と姻戚関係にある沙州令公(ḍikau=帰義軍節度使曹氏)の手によって前進を差し止められる。使節団は、前進することが国王の命令であることを主張して、令公の出発許可を強く求めて交渉を重ねるが、その結果、道中の危険に際しては自ら責任を負い、いかなる事態が起るうとも令公の責任を問わぬことを明言した一札を入れることを条件に、使節団のうち二、三人の代表のみ情勢視察のため出発を許可される。そこで使節団は、令公の求めに応じて khalavī(証書、誓約書)を起草するが、その場面は次の如くである。P 2786.27-28 KT 2.94 khalavī padaidaudū ḡkṣara haguṣṣa hā niṣaudū(同文が P 2786.111-112 KT 2.97にある)「我等は(求められた)証書を作成した。(そこに)我等は akṣara と haguṣṣa を記した(lit.発した)」。この akṣara とは何かは、別のコータン語写本 Ch. cvi. 001 KT 2.59-61の写真版に見ることができる。この文書の末尾(verso 7-8)には四人の人名があり、その各々に akṣä(')rā の語と一種の記号が続く。この記号は一つずつ異なっており、その位置と形状からして、おそらくは中国語文書に現れる「花押」⁽⁵⁾に相当するものと思われる。

これに対して、ここに後期コータン語では予期しうるヴァリエントといえる haguṣṣa の綴りで現れ、より普通には hamguṣṣa の形で多くのコータン語文書の末尾に人名と共に見出される語が「指」を意味することは、既に我々の確実な知識となっている。⁽⁶⁾そこで問題は、コータン語文書において指がどのように用いられたかである。

仁井田前掲書(注5)37頁以下によれば、指をもってする代用署名には基本的に二種ある。その一つは言うまでもなく「指印」であり、文盲の者が書類に記された自己の名前の下に重ねて拇印を押すことによって自署に代えるものである。唐大中6年(852)の日付のある P 3394にこの例が見られる。⁽⁷⁾代用署名としてこれに劣らず広く用いられたのは「画指」で、本来は指の形状を表わすため、二本の縦線を三本ないし四本の短い横棒で区切って、二ないし三個の細長い長方形をつくり、これが署名人の人差指(時に中指)の指先から第一関節、第一関節から第二関節等々の長さに見合うものとされた。後周顯徳5年(958)の日付をもつ P 3397には、この各々の長方形に「左手」、「中指」、「節」等の文字が記されているのが見られる。⁽⁸⁾このような本来の画指と並んで、より単純化された形も広く行なわれた。これは一本の縦線と三本の短い横棒、あるいは単に三本の短い横棒のみ、更には三つの点のみが指先と関節の位置を示すものである。仁井田前掲書54頁以下は、中国式の画指が更に西夏、朝鮮、ベトナム、日本にも見られることを記している。

しかし上にあげられたような敦煌出土の中国語文書とまず比較されるべきは、同じく敦煌出土のチベット語文書だろう。この中に画指の例の存在することは、既出版のカタログ類に引用されたいくつかの文書の末尾の表現から推測できたが、最近になってこれらの文書が写真版で出版された⁽¹⁰⁾ため、具体的にそれを確認することができるようになった。P. T. 1087(前注 *Choix de documents*, pl. 434)及び P. T. 1101(同 pl. 444)には、横長の長方形が三つの部分に仕切られ、その中に属格語尾を伴う人名に続いて 'dzub-/mdzub-tshad「指のサイズ」の表現が見られる(つまり「誰々の指のサイズ」)。同じ表現は更に Thomas 前掲書(注9)の45, 46及び66頁にも見られる。これと類似

した表現に *sug-yig tshad/rgya* 「手文字のサイズ」というものがあり、P.T. 1078 (*Choir de documents*, pl. 422), P.T. 1104 (同 pl.445) 及び Thomas 前掲書 46, 59, 137, 141, 144, 149 頁に見られる。この場合は、上記ペリオ写本の写真版は、細長い長方形の内部に仕切りを示さない。またこの二種類の文句のどちらも、写真版で見られる限りは、文書の本来の部分とは文字の向きが上下逆に書かれていることが注目される。これは、仁井田前掲書に扱われた画指の例で、指を型取りのため差し出す人物(すなわち文書の署名者)が文書の書記に向かい合っているかのごとく、指先が文書の下辺に、指の付根が上辺に向かって表わされるものと軌を一にしている。

コータン人もまた画指を用いたことは確実である。これは、現存のコータン語文書のうち約20点⁽¹¹⁾の末尾に、多くの場合人名に続いて *hamguṣṭa* 「指」の語が用いられ、しかもこの語のブラーフミー文字の各 *akṣara* が三本の短い縦線で区切られているか (*[ham|gu|ṣṭa]*)、あるいはこの語のわきに三本の短い縦線がそえられているのが見られることから明らかである。これに対して、「指印」の具体的な例は、今までのところコータン語文書の中に見出されてはいない。従って、コータン語文書の *hamguṣṭa* とは、既に戦前に S. Konow が認めたとく「画指」に相当するものであり、Bailey が辞書 (*'hamguṣṭa'* の項)⁽¹²⁾ で想定した「指印」ではない。上記引用の一節 (P 2786. 27-28 = P 2786. 111-112) において、コータン国使節は誓約書の末尾に自己の指の形状と長さを象徴する三本の線を記入したのである。

この P 2786 写本には *hagaṣṭa* の語がもう一度登場する。この写本の最後の三分の一 (172-250 行) は、スタイン収集 Or. 8212.186 (80 行, *KT* 2.10-12) に異本があり、P 2786.213 *KT* 2.100 *hagaṣṭa* に対して Or. 8212.186. a51 *KT* 2.12 は *hagaiṣṭa* の綴りを与えている。Bailey の辞書は後者を見出語として採用し、同欄に前者をヴァリエントとして収録して、両者に “information” の意味と、それに沿った *paper etymology* を与えているが、そのような意味の語は存在しない。後者の *-gai-* は *-gau-* の誤記と見なされるべく、共に *hagaṣṭa* すなわち *hamguṣṭa* 「指」に他ならない (P 2786 と

Or. 8212.186 の二つの異本の優劣と時間的前後関係については別に論じたが⁽¹³⁾、一般に前者は後者に比べ、報告の作者自身によって改良されたテキストを示す、と見なされるべきである)。

この二つの写本によって構成されるテキストは、やはり *Ana Samgai* が沙州からコータン政府に送った報告の下書きで、問題の個所では、コータン政府の代理人として中国へ旅することを志願した一連の人物の行状について報告しているのだが、そのうちの二番目に登場する人物についての記事の中に *hagaṣṭa* の語が用いられる。Or. 8212.186 の方は一部欠損があるので、この一節を P 2786.211-214 *KT* 2.100 で紹介すると、以下のごとくである——
*ca mau thā-le tcūha-paḍā rrvī vī haṣḍā yūḍai sa caiga kṣira tsūm: chū-birā virāṣṭā hā hagaṣṭa hūḍai rrvī vī ttā kabala hai'sū sṣā khu caiga kṣira na tsinai: [Mau thā-le Tcūha-paḍā (人名, 最後の部分は Tib. gtsug-dpal ?) は (コータン) 宮廷に請願してこう言った, 『私が中国へ参りましょう』。彼は『枢密』に次のように言って, 画指 (*hagaṣṭa*) を与えた, 『私は宮廷 (=政府) に百枚の毛布 (Skt. *kambala*) を献上しましょう。どうして私が中国に行き得ないことがありますでしょうか?』。ここで「画指を与える」とはいうまでもなく「誓約する」ことを意味し、その誓約の内容が次に述べられている。*

Bailey は辞書の *hagaiṣṭa* の項で、E. G. Pulleyblank によってかつて提案された *chū-birā* = 「枢密」の比定を放棄して、⁽¹⁴⁾ 「中密」なる架空の語を作りあげているが、前者の比定で音韻的にも歴史的にも無理がない。中国本土以外での「枢密使」の称号の使用には、宋会要 (蕃夷 4) の伝える咸平 4 年 (1001) の記事 (亀茲ウイグルの遣使) 及び (蕃夷 7) 大中祥符 3 年 (1010) の記事 (甘州ウイグルの遣使) に例がある (E. Pinks, *Die Uiguren von Kan-chou in der frühen Sung-Zeit*, Wiesbaden 1968, 31 及び 39 を参照)。

2. sūli

スタイン収集コータン語写本 Ch.00269.23-111 KT 2.43-47 はコータン人使節 Chikā Gulai と Dūm Samgalakā が沙州からコータンへ送った報告の下書で、七人のコータン王子を警護して中国に向かう二人が、旅の途中で出会った様々な民族の動き等を描写している（これに続く112-120行は、この七人の王子による手紙の下書⁽¹⁵⁾）。このテキストの78-79行目(KT 2.46)に次のような一節がある。cu dūmva u cahā:spata u sūlya tta jsām kitha khu tta viña drai pacaḍa biśā hamtsa ni samimpe kāmācū hā hervi haḍā ni ttramḍā hame 「Dūm⁽¹⁶⁾ と Cahā:spa と Sūli についていえば、彼らは(甘州の)町に居り、今やこの三種類(の人々)が皆共に認めない限り、いかなる使節も甘州に入ることはできない」。この sūli (Npl. sūlya) という語の解釈は、過去数十年にわたって様々に試みられたが依然として未解決の問題である。従ってここでその研究の歴史を整理して、最終的な結論には至らないにせよ、それぞれの議論のうち取るべきは取り、捨てるべきは捨てることも有意義と思われる。

Bailey が最初に上記の Ch. 00269 の一節を出版した時は、チベット語の shu-lig を考慮して sūlya (sg. sūli) に“people of Kāshghar” という訳を与えた(BSOS 8.4, 1937, 883, fn.3—但しここではチベット語形は su-lig として引かれている)。しかし同じ論文の末尾の“Addenda”(p.918)では、これは“Sogdians”であろう、と訂正され、以前に同著者によってまとめられたイラン諸語及び周辺の諸言語における「ソグド」の名のリストにこれを加えることができる、とされた。このリストとは1932年の論文⁽¹⁷⁾の一部で、パフラヴィアの Bahman Yašt 中の国名、民族名のリスト(Anklesaria ed. IV § 58に相当)に現れる swptyk (Bailey の読みでは suḅḅik) を“Sogdians”と認め、更に当時までに知られていた「ソグド」という語を、大きく四つのグループに分類整理したものである。すなわち、1) -ugd/-urd- を示すもの: OP

s-u-g^a-d-, s-u-g^a-ud-, s-u-g-d-, 及び Elam. šú-ug-da, Akk. su-ug-du (Gr. Σογδοί—Herod.); Av. Vd. 1.4 surḅḅ.šaiiana-, Yt. 10.14 (Gld.) suxḅḅam (Bth. は surḅa-); Sogd. Anc. Lett. II 7, V 14 swrḅyk, II 37 swrḅykt (pl.), II 9 swrḅyk'nw (obl. pl.) 及び w-metathesis を伴って Intox. 37 sṛwḅy'n'k “Sogdian” (D.N. MacKenzie (ed.), *The Buddhist Sogdian Texts of the British Library*, Téhéran-Liège 1976, 10は誤植。同書 p.131参照。) ; 以上に加えて Pāzand (Ind. Bd.) soṛd, NP surd (Hudūd al-'ālam), Orkhon Turk. soṛdaq が挙げられる。2) -uḅḅ- を示すもの: Pahl. suḅḅik (上記) 及び Arm. sovdik' (Marquart, *Ērānšahr*, p.88, n. 7)。3) -ūḅ-/ūd- を示すもの: Syr. sōḅ, sōḅīqāyē “Sogdians” (Alexanderroman; Marquart 前掲注参照); Pahl. sūḅ (Bailey の読み。以下同) (Bd. TD₂ 87.14 swt' = TD₁ 72.11 swt), šūḅ (?) (Bd. TD₂ 87.10 šwt' = TD₁ 72.7 šwt); 及び Pāzand sūdi (Bahm. Yt.), sudā (Ind. Bd.)。4) -ūl- を示すもの: Pahl. sūlik (Bailey の読み) (Bd. TD₂ 205.11 swlyk = TD₁ 176.5 swlyk; TD₂ 86.11 swlk = TD₁ 71.12 swlk); Vd. 1.4 Pahl. swlyk (Hoshang Jamasp ed. p.6, fn. to 5.1); 更に中国語の su-li とチベット語 shu-lik⁽¹⁸⁾ (共に後述) がここに属する。

この Bailey の論文の後、いくつか新しい材料が出版された。ソグド語の二つの形 (swrḅ-/sṛwḅ-) は Henning, *Sogdica* 61.25 sṛwḅ'w zḅ'k “the Sogdian language”, MSogd. s]wṛḅy'w 及び swṛ]ḅḅy'w (GMS 1076), ソグド文字で s(wṛḅy)w 及び swṛḅ'yw (Henning, “The Book of the Giants” BSOAS 11.1, 1943, 70, H 11, 14) (以上すべて “Sogdian” の意味) 及び sṛwḅyk の形で Mug 文書に13回⁽¹⁸⁾現れる。それ以外にソグド語 Nāfnāmak の swt'yk (*Sogdica* 8-9), MMP swṛlyy (Henning, *BBB* 462, p.32) が注目される。また碑文のパルティア語 swgd (Šābuhr at Ka'ba-yi Zardušt, Pa 2) も参照。トゥムシュク・サカ語 sudana は S. Konow, “Ein neuer Saka-Dialekt”, SPAW 1935, によって出版されたテキストに4回現れ (p.822b), Henning, “Neue Materialien zur Geschichte des Manichäismus”, ZDMG 90, 1936,

13, に従って Konow は後にこれを “Sogdian” と訳した(“The oldest dialect of Khotanese Saka”, *NTS* 14, 1947, 163以下)。カローシュティエー文書 No.661に現れる *suliga-* については後述する(注24)。

Bailey がスタイン及びペリオ収集のコータン語文書を本格的に解説、転写したのは1930年代の後半で、ヘディン収集のものをこれに加えて1963年までにそのほぼ全部のローマ字転写を出版したのだが、その中に *sūli* の語が現在までに約20例見つかった⁽¹⁹⁾。これらの例を考慮して、1939年に Bailey が *sūli/sūlya* の語を扱った時⁽²⁰⁾、主として中国語資料を根拠に⁽²¹⁾ “Sogdians” の意味が与えられた。同じく1949年に Bailey は P 2741.9 *sūlya* を “Sogdians” と訳し、“the identification still remains unsettled” と注を与えた⁽²²⁾。しかし1961年に Hedin 1.6 *sūlya* を扱った時 (*KT* 4.59), Bailey はそれまでの “Sogdian” の意味を全面的にしりぞけ、これを中国語の「書吏」(“scribes, secretaries”) とした (P.Demiéville と G.Haloun が別々に提案したとされている)。その後 *Saka Documents Text Volume*, 1968, 及び1979年の辞書を通じてこの意味は維持されたが、1982年に出版された *The Culture of the Sakas in Ancient Iranian Khotan*, Delmar, N.Y., 23 において、明らかに民族名を示す文脈で用いられた上記 Ch. 00269.78の例を “Sogdian” とし、その他の職業名を表わすと思われる例を、これから派生した “merchant” と解釈した⁽²³⁾。

以上がコータン語 *sūli* の研究史である。コータン語だけに限らず、原典の明らかな翻訳テキスト中にこの語が現れない限り、議論は状況証拠をいかに評価するか、という点に落着かざるを得ない。以下において、*sūli* について今までに提出された 1) Kāshghar 説、2) Sogdian 説、3) 「書吏」説を順次検討していきたい。

1) Kāshghar のチベット名 *shu-lig* ないしは *shu-leg* (F.W.Thomas, *Tibetan Literary Texts and Documents* に *passim*, Part 4 の Index 79a を見よ; R.E.Emmerick, *Tibetan Texts concerning Khotan*, London 1967, 105a も参照) は中国語の「疏勒」(あるいは同音の「疎勒」) ないしは「沙勒」に由来するといわれる (水谷真成『大唐西域記』390; E. Chavannes, *Documents sur*

les Tou-kiue (Turcs) occidentaux, St.-Petersbourg 1903 (repr. Paris n.d.), 320a; V. Minorsky, *Hudūd al-'Ālam. 'The Regions of the World'*, London 1970², 280; F.W.Thomas, *Tibetan Literary Texts* 3.12参照)。「沙勒」の形は「悟空入竺記」(大正蔵51.980c)に「疎勒」の別名としてあげられている (S. Lévi/E.Chavannes, “L'itinéraire d' Ou-k'ong”, *JA* ser.9, v.6, 1895, 362参照)。「疏勒」, 「疎勒」の方は漢書以来用いられる (A. F. P. Hulsewé, *China in Central Asia. The Early Stage: 125 B.C.-A.D. 23*, Leiden 1979, 141及び fn.373) が、その起原は不明である (水谷前掲書)。Kāshghar という名の音写は唐以来用いられ (水谷 389注)、「大唐西域記」は「佉沙国」に注して「舊謂疏勒者。乃稱其城号也。正音宜云室利訖栗多底。疏勒之言。猶為訛也。」とするが、この「室利訖栗多底」(水谷 **śri-kritati*(?)) という名は他に全く知られていない (Marquart, *Ērānsahr*, 284, *Wehrot und Arang* 68, fn. 3 参照)。

さて以上の中国語形(「疏勒」, 「疎勒」及び「沙勒」)とチベット語形をコータン語 *sūli* との関係で考慮するとき、問題になるのは語頭子音である。中国語形の第一字はいずれも正歯音審母二等に属する。8世紀以後の西北方言では、正歯音の二、三等の区別がなくなったことが知られており (羅常培『唐五代西北方音』21; E. G. Pulleyblank, “Late Middle Chinese”, *Asia Major*, n. s. 15.2, 1970, 219 参照), 切韻の体系の二等 (そり舌音) と三等 (硬口蓋音) に代わって唯一のそり舌音の系列が出現した。これはチベット文字では sh で転写される⁽²⁴⁾のだが、コータン語では語頭は例外なく *sū-* であり、これに対して我々はむしろ心母 (s) の文字を期待するのである。

2) ソグディアナに対する中国名は後漢書以来「粟特」(Karlgren, *Analytic Dictionary* 135+811 *si*ok-d'ək*)⁽²⁵⁾ 及びそれに類する形である。ところが唐代になると、第二字に1-音を示す形が出現する。玄奘の「率利」⁽²⁶⁾ (注21) は明らかにソグディアナ及びその周辺地域を指す。今世紀初頭にソグド語が解読されると同時に「率利」は Sogd. *swrḍyk* を表わすものと認められた⁽²⁷⁾。これに加えて、上記注21にあげた「速利」(Karlgrenの909+527 *suk-lji*)、⁽²⁸⁾ 「孫隣」(同832

+556 suan-ljēn), 「蘇哩」(同823+529(?) suo-lji) が同一起原に溯る可能性が充分ある。「新唐書地理志」巻43 下には, 「大汗都督府」に属する「速利城」と「宿利(821+527 sjuk-lji) 州」(Chavannes, *Tou-kiue* 69n参照) がある。これらが果して実在の地名を正確に伝えるのかどうか不明である。このような語形が「粟特」に代表される古い形から発展したのか, あるいは方言差を示すのかは断言することができない。いずれにせよこれらがコータン語の *sūli* に最も近いことは確かである。そしてこれらは上に触れたパフラヴィの *swlyk*, マニ教系 Middle Persian の *swrlyy* と比べることができる。

玄奘の「率利」に関して S. Lévi が R. Gauthiot (“Compte-rendu de V. Thomsen, ‘Ein Blatt in türkischer «Runen» schrift aus Turfan’, F. C. Andreas, ‘Zwei soghdische Exkurse’”, *JA* ser. 10, v.15, 1910, 542) のためにプラーナ文献や Varāhamihira の *Bṛhatsamhitā* から収集したサンスクリット *śūlika-* の用例(大部分は PW にある)も, 中国語形自体ではないにしても, 中国語形が基づいたのと同じ方言形に溯ると考え得る。但しこの場合はイラン語の *sā-* に対して語頭子音のサンスクリット化を施した *śū-* を示している。Tāranātha の *shu-li-ka* (A. Schiefner, (ed.), *Tāranātha. De doctrinae Buddhicae in India propagatione narratio*, St. Petersburg 1868, 63.8; Jäschke の辞書559b “name of a fabulous country in the north-west”) もこのサンスクリット形を再転写したものと考えられる。Al-Birūnī の *India* は, *Matsya Purāṇa* から引用して, *Cakṣus* 河(即ち *Vakṣus*=*Oxus*) 流域に *Dhūlika*(?) という国がある (E. C. Sachau, *Al-Beruni's India*, London 1910, Vol.1, 261) とし, これに対して Sachau は *Vāyu Purāṇa* 47.44 から対応する箇所を引用 (Vol.2, 330) するが, その形は *mūlika* (PW によれば *śūlika* のヴァリエントとしてしばしばある形) で, 実際の *Matsya* は *śūlika* の語形をもつ (Gauthiot, 前掲論文)。また同じく *Vāyu Purāṇa* には北方の民族の一つに *Sūlika* というものがあるとする (Vol.1, 300) が, 実際に *Vāyu Purāṇa* 45.121に現れる形は *cūlika* (Vol.2, 336) である。また *Bṛhatsamhitā*

による西北民族の一つに *Sūlika* というものがあるとする (Vol.1, 302) が, これについて Sachau はアラビア語とサンスクリットのテキストの隔りあまりに甚しい (Vol.2, 337) として, その追跡を断念している。

P. C. Bagchi は “*Śūlika, cūlika and cūlika-paiśāci*” と題する論文 (*Journal of the Department of Letters, Calcutta University*, 21, 1931, 1-10) で, この三つの名前を “Sogdian” に等しいものとしたが, A. Master, “The Mysterious *Paiśāci*”, *JRAS* 1943, 230, は Bagchi のこの理論をしりぞけた。最後に, 最近になって Gilgit 写本の中に *śūl-* ないし *śūli-* の語を含む固有名詞の存在が報告されている (O. von Hinüber, “*Namen in Schutzzaubern aus Gilgit*”, *StII* 7, 1981, 168及びn.11)。

以上のサンスクリット *śūlika* の用例で, 明らかに *Kāshghar* と関係させ得るものはない。しかし, もし中国語の「疏勒」ないしはチベット語の *shu-lig* が漠然とした形でプラーナの作者や Varāhamihira に知られていたならば, これがイラン語の「ソグディアナ」の名と混乱して受容されたということは考えられる。

3) コータン語 *sūli* を「書吏」と解する説は, 先の「疏勒」と同じ性質の困難に直面する。「書」の語頭子音は同じく正歯音三等で, 唐代後期, 五代にはそり舌音をもっていた。羅常培が収集したチベット文字で中国語を表わした例で, これは通常 ζ (=sh) で表わされ, dental の *s-* とは区別されている (羅前掲書21, 23)。この区別に対する例外は同書84頁 (12), (13) にあげてあるが, 羅常培によれば (同書164頁), これらの例外が表わすものは, 10世紀になって西北方言に現れ始めた, 歯頭音四等の心邪母 (*s-*, *z-*) が対応する正歯音三等の審禪母 (当時はそり舌音) に合流する傾向である。その際歯頭音一等の心母にはこの変化は起らない。

Bailey は, コータン語 *sūli* と「書吏」の語頭の対応を説明するために Staël-Holstein roll 12 *KT* 2.73 *sucanā* の壽昌 (敦煌の西南約40km) による比定⁽²⁹⁾をあげる (*KT* 4.59)。この名は都市名のリストの中で *raurata* と *ṣacū* (沙州) の間にある。前者をもし *Krorayina* (楼蘭) に比定することができ

れば (Bailey, *Asia Major* n.s.2, 1951, 11; Hamilton, *TP* 46, 1958, 122), 地理的關係からいって *sucānā* = 「壽昌」の可能性も高い。しかしそう結論するには音韻的な障害が大きく、もしこの比定が動かせないとすれば、極度に例外的な対応といわざるを得ない。というのは、第一に、「壽」は正歯音三等の禪母に属すが、チベット文字での転写が普通清音と濁音の区別をせず、濁音の禪母が清音の審母と同様に扱われるにもかかわらず、三等のそり舌音の声母がチベット文字の *s-* で表わされた例はなく、従ってブラーフミーでも *s-* で表わされたとは考えられない。羅常培が示したのは、それとは逆に、歯頭音声母 (*s-, z-*) のうち四等に属すものが、正歯音二、三等の声母 (すなわち、そり舌音) と同じく、例えばチベット文字の *sh-*、ブラーフミーの *ṣ-* で表わされ得る、ということである。第二に、「昌」の難点は韻尾にある。この字が属する宕攝 (Karlgren の *-jiaŋ*) の喉音韻尾は消失の傾向にあり、チベット文字では全く表わされない (例えば *-o*; 羅前掲書36—42) ことが多く、ブラーフミーでも *-ā, -au* の表記が一般である。ここれに対してブラーフミーの *-anā* は、通常山攝 (*-n* 韻尾をもつ) に対応する。

以上コータン語 *sūli* に対する三つの説を検討したが、1) 「疏勒」説と3) 「書吏」説は音韻的な困難が大きく、それを帳消しにするほどの意味対応の上でのメリットも見られない。これに対して2) “Sogdian” 説は、音韻的には最も無難といえる。またイラン語内部でもゾロアスター教の書物に *swlyk* の形が現れることに注目すべきである。玄奘の「窣利」についての詳細な記述は、これと「ソグディアナ」の対応に疑いをいだかせない。先にあげた多くの言語の、中間に *-l-* を示す形の直接の起原は、こうしてソグド語の形容詞 *swrḍyk* (又はその別形 *srwḍyk*) に求められるべきである。ただしコータン語の *sūli* が厳密に「ソグディアナの出身者、ソグド語を話す者」の意味で常に用いられたとは、必ずしも考える必要はない。それは丁度中国人が「胡⁽³²⁾」という名称を用いる時、相手が中央アジアのどの都市の出身者か一々気にならなかったと思われるのと同様で、コータン語の *sūli* もより広い意味、場合によっては「(貿易) 商人」のような意味に理解されるのである。

注

- (1) R. E. Emmerick, “A Khotanese Fragment: P 5536 bis”, in *Monumentum H. S. Nyberg I*, Téhéran-Liège 1975, 225. 更に Or.8212.162.98—99 *KT* 2.6, P 2027.48—49 *KT* 2.81, P 4068.7—9 *KT* 2.123, P 4649.2 *KT* 2.124, P 2896.25—26 *KT* 3.94, P 2942.1—2 *KT* 3.109, P 4089b. 7 *KT* 3.117 参照。多少のヴァリエーションを伴うものには、例えば Ch. 00269.11 *KT* 2.42, P 2897.14 *KT* 2.114, P 2896.46—47 *KT* 3.95 等がある。(KT=H. W. Bailey, *Khotanese Texts I-V*, Cambridge 1945—63)。
- (2) H. Reichelt, *Die soghdischen Handschriftenreste des Britischen Museums II*, Heidelberg 1931, 61. 但し以下の読みは吉田豊氏による。
- (3) S. Tezcan/P. Zieme, “Uigurische Brieffragmente”, in L. Ligeti (ed), *Studia Turcica*, Budapest 1971, 457 (写真版は、黄文弼『吐魯番考古記』1954, 圖版八一、圖79)。森安孝夫氏の教示による。
- (4) H. W. Bailey (ed.) *Saka Documents I* (Corpus Inscriptionum Iranicarum, Part II, Vol. V, Portfolio I), London 1960, plate VIII
- (5) 仁井田陞『唐宋法律文書の研究』1937, 24頁以下参照。
- (6) H. Lüders, “Die śākischen Mūra”, 1919, in *Philologica Indica*, Göttingen 1940, 466, n.1 及び p. 788 に若干の訂正。S. Konow, “Where was the Saka language reduced to writing?”, *Acta Orientalia* 10, 1932, 73. また Bailey の辞書 *Dictionary of Khotan Saka*, Cambridge 1979, の *hamguṣṭa* の項参照。

- (7) 仁井田前掲書 194 頁以下及び函版 2 ; 池田温『中国 古代 籍帳 研究』
1979, 576 頁以下参照。
- (8) 池田前掲書 658 頁以下参照。
- (9) M. Lalou, *Inventaire des manuscrits tibétains de Touen-houang; fonds Pelliot tibétain II*, Paris 1950 及び F. W. Thomas, *Tibetan Literary Texts and Documents concerning Chinese Turkestan, Part II*, London 1951。
- (10) A. Spanien/Y. Imaeda, *Choix de documents tibétains conservés à la Bibliothèque Nationale, Tome 2*, Paris 1979。
- (11) 以下の文書の末尾を, Bailey によるローマ字転写及び部分的には *Saka Documents* の写真版で見よ。
Or. 11252.16 *KT* 2.22, Or. 11252.36 recto *KT* 2.28, Hoernle 1 *KT* 2.64, Hoernle 7 *KT* 2.66 (*Saka Documents II*, London 1961, pl. XXVIII), Hoernle 9 *KT* 2.67, Dandan uilik III 12 *KT* 3.138, Hedin 4 *KT* 4.24, Hedin 26 *KT* 4.38-39 (*Saka Documents I*, London 1960, pl. VI), Or. 6392 *KT* 5.1, Or. 6393.1 *KT* 5.1 (*Saka Documents II*, pl. XXV), Or. 6393.2 *KT* 5.2 (*Saka Documents II* pl. XXV), Or. 6395.1 *KT* 5.3-4 (*Saka Documents II*, pl. XXVII), Or. 6396.1 *KT* 5.4, Or. 6397.2 *KT* 5.6 (*Saka Documents II*, pl. XXVIII), Or. 6400.1.4 *KT* 5.9, Kha. vi. 14.b1 verso *KT* 5.180-81 (*Saka Documents IV*, London 1967, pl. LXXIV), M.T. 1.17 *KT* 5.207 (*Saka Documents III*, London 1964, pl. LXII), Hardinge 079.1 *KT* 5.288, M.T. a. 1.0041 *KT* 5.386 (*Saka Documents III*,

pl. LVII).

- (12) S. Konow, "Ein neuer Saka-Dialekt", *SPAW* 1935, 774.
- (13) H. Kumamoto, "The Khotanese Documents of the Pelliot MS P 2786", in *Proceedings of the Thirty-First International Congress of Human Sciences in Asia and North Africa, II*, Tokyo 1984, 987 以下。
- (14) Apud H.W. Bailey, "Śrī Viśa' Śūra and the Ta-uang", *Asia Major*, n.s. 11.1, 1964, 13 及び fn. 24。
- (15) このテキストはまず部分的に (75-80行) Bailey によって紹介, 翻訳され ("Ttaugara", *BSOS* 8.4, 1937, 883-884), ついで全体が出版, 翻訳された ("The seven princes", *BSOAS* 12.3-4, 1948, 616-624)。更に *Saka Documents Text Volume*, London 1968, 110-112 の新訳は, いくつかの点で旧訳に改良が加えられている。
- (16) この Dūp (Ch. 00269.71 *KT* 2.45 dūṃta, 78 *KT* 2.46 dūṃva, P 2741.69 *KT* 2.90 dūṃta, 84 *ibid*, dūṃta, 103 *KT* 2.91 dūṃvi, StH 30 *KT* 2.74 dū) に関して, Bailey は最初は (*BSOS* 8.4, 1937, 898 以下, *TPS* 1947, 152 以下) 中国語の姓「龍」(本来は焉耆王家の姓, 後に河西地方に「龍家」として知られる) と解釈したが, 後に (*Asia Major* n.s. 11.1, 1964, 7) これを *dung または *dong の発音を写すものとし, チベット語 ldong, 中国語「董」に対応するものとした。なお「龍」については, J. Hamilton, *Les Ouïghours à l'époque des Cinq Dynasties*, Paris 1955, 92-93, fn.4 参照。ldong については, R.A. Stein, *Les tribus anciennes des marches sino-tibétaines*, Paris 1961, 44 参照。cahā:spata (sg. は cahā:spa?) は ἀπαξ で何に対応するか不明。cahā:-

は他にトルコ語の *čar-* で始まる単語を音写した例がある。

- (17) "Iranian Studies", *BSOS* 6.4, 1932, 945-955, 特に948-950.
- (18) O. Szemerényi, *Four Old Iranian Ethnic Names: Scythian-Sogdian-Saka*, Wien 1980, 29以下に分類されたものによると, (a) MN *srwδyk MLK' δyw'styc* "from Dēwāštic, the Sogdian king" (6回), (b) *srwδyk MLK' sm'rknδc MR'Y δyw'styc* "Dēwāštic, king of the Sogdians, lord of Samarkand" (5回), (c) 't *βrw xwβw RBch 'nwth srwδyk' MLK' sm'rknδc MR'Y δyw'styc* "to Dēwāštic, (our) master (and) ruler, (our) mighty protection, king of the Sogdians, lord of Samarkand" (2回)。これ以外に Mug 文書には *swγδ'k* が一回, *srwδy'nk* が二回見つかっており, また最近出版された A.N.Ragoza, *Sogdijskie Fragmenty*, Moskva 1980, には *swγδ'yk'* の形が現れる (吉田豊氏による補足)。
- (19) 上記 Ch. 00269.78 *KT* 2.46 に加えて, Or. 11252.2.17 *KT* 2.15 *sūlyāna*, Or. 11252.36.b2 *KT* 2.28 *sūli*, Or. 11252.38.1 *KT* 2.29 *sulina*, 同3 *sūlya*, Or. 11344.4.4 *KT* 2.34 *sūlya*, Or. 11344.16.2 *KT* 2.38 *sūlyau jsa*, Ch. 00269.55 *KT* 2.44 *sūli*, P 2024.35 *KT* 2.77 *sūlyā*, P 2741.9 *KT* 2.87 *sūlya*, P 2786.70 *KT* 2.95 *sūlyām jsā*, Hed. 1.6 *sūlya*, 同1.7 *sūlau jsa*, 同19.18 *sūlya*, 同19.20 *sūlo jsa*, Or. 6394.2.3 *KT* 5.3 *sūlyā*, 同4 *sūli*, 同5 *sūli*, M. T. 0463.b8 *KT* 5.199 *sūli bisa*, D. iv. 6.1.a1 *KT* 5.258 *sūli*。
- (20) "Turks in Khotanese Texts", *JRAS* 1939.85-91, 特に89頁。
- (21) 「大唐西域記」巻一の「率利」(Bailey は前注の論文で「率」に誤っ

て「卒」の音価を与えているが), 「南海寄帰伝」の「速利」(大正蔵 54, 222a, 19, fn. 13), 「梵語千字文」の *suli* = 「胡」(大正蔵 54, 1196a, 25-6), *suli* 「孫隣」= 「胡」(同 1216a, 3; Bagchi, *Deux lexiques I*, 244, 336, No. 285), 「梵語雑名」の「蘇哩」= 「胡」(同 1236a, 12; Bagchi, I, 77, 295, No. 861) 等は水谷真成訳『大唐西域記』1971, 20 にまとめられている。(ただし以上の「サンスクリット」*suli* は, むしろコータン語だろう。) Bailey は以上のうち「大唐西域記」と Bagchi の用例に言及する。これに「大智度論」巻25の「修利」(「修」は心母四等)(大正蔵 25, 243a, 10; Lamotte, *Traité, T. III*, Louvain 1970, 1585) を加えれば, *-li* の発音は400年前後まで溯ることができる (S.Lévi, *JA* 222, 1933, 24-25 = *Fragments de textes koutchéens*, 1933, 24f.; P. Pelliot, *JA* 224, 1934, 36, fn. 2参照)。

- (22) "A Khotanese Text concerning the Turks in Kanṭṣou", *Asia Major*, n.s. 1.1, 1949.47.
- (23) 同趣旨が筆者宛の1980.3.20の書簡にある。ここで Bailey は, これまで無視されてきた N 169.10 *sūliya* (E. Leumann *Buddhistische Literatur. nordarische und deutsch. I Teil: Nebenstücke*, 1920 [= AKM 15.2], では翻訳せず; Konow, *Saka Studies*, Oslo 1932, 183a, は "unidentified acc. pl. [perhaps: the Sogdians]" とする) を *sūli* の NAPI. *sūlya* の "old form" としている。この語は Valāhāssa Jātaka (Pāli Jātaka No. 196, Jātaka-stava: story No. 4) に相当するペトロフスキー収集の古コータン語の詩節に現れ, 二人称で呼びかけられる仏陀が羅刹の手から商人 (*sāṭā* = Skt. *sārtha-*) を救ったことを物語る。*sūliya* が前の行の *sāṭā* を指すことは可能だが, *ia* 語幹の NAPI 形としては *iya* なる形は古新コータン語とも例を見ない。

(24) カローシュター文書No. 661 (Boyer, Rapson, Senart (ed.) *Kharoṣṭhī Inscriptions, Part II*, Oxford 1927, 249及び Plate II; この文書についての詳細なビブリオグラフィーが R. E. Emmerick, "The Historical Importance of the Khotanese Manuscripts", in J. Harmatta (ed.) *Prolegomena to the Sources of the History of Pre-Islamic Central Asia*, Budapest 1979, 168, n.7にある)に *suliga-* という語が現れる。F.W.Thomas, *Tibetan Literary Texts* 2.259 はこれを「疏勒」とチベット語 *shu-lig* に関係させたが, NW Pkt. は三種類の無声 sibilants を区別するので (T. Burrow, *The Language of the Kharoṣṭhī Documents from Chinese Turkestan*, Cambridge 1937, §33; この文書の言語特徴については更に Burrow, "The Dialectal Position of the Niya Prakrit", *BSOS* 8.2-3, 430-435参照), これは受け入れがたい。Burrow, *Language* 131は "either 'inhabitant of Kashghar'.....or possibly 'Sogdian'" とするが, 二者から選ぶとすれば後者であろう。Thomasは後に("Some Notes on Central Asian Kharoṣṭhī Documents", *BSOAS* 11.3, 1945, 525以下) この語に関連して「疏」 (=「疎」) の「二種の発音」, すなわち (Karlgren の) *ṣu* 及び *su* (*Analytic Dict.* 904) について触れるが, これは現代語のことで, 中古漢語にそのような区別は認められない。「疏」及び「沙」の広韻における二箇所の記載は声調の差以外は同音を表わす。

(25) 代表的な研究は, 白鳥庫吉「粟特國考」(『東洋学報』14, 1924, 453-545, のち『西域史研究』下巻, 『全集』7巻に収録。英語版 "A Study of Su-t'ê or Sogdiana", *Memoirs of the Research Department of the Tōyō Bunko* 2, 1928, 81-145, は Pelliot, *TP* 26, 1929, 365 に注目された。海外で発表された研究では更に, P. Pelliot, "Tokharien et koutchéen", *JA* 224, 1934, 23-106, 特に34, fn.1; O. Maenchen-Helfen, "Huns and Hsiung-nu", *Byzantion* 17, 1945, 225-231;

K. Enoki, "Sogdiana and the Hsiung-nu", *CAJ* 1, 1955, 43-62; R.A.Miller (tr.), *Accounts of the Western Nations in the History of the Northern Chou Dynasty*, Berkeley and Los Angeles 1959, 33以下, fn. 91 参照。

(26) 「宰」は蘇骨切, 従って Karlgren の体系では *suət-lji* となる。

(27) F. C. Andreas, "Zwei soghdische Exkurse zu Vilhelm Thomsens: 'Ein Blatt in türkischer Runenschrift'", *SPAW*, 1910, 308。更に R. Gauthiot, *Essai de grammaire sogdienne. Première partie: phonétique*, Paris 1923, vi 参照。アラム文字の *l* から発展したソグド文字の *ḷ* とその発音に関しては, N. Sims-Williams, "The Sogdian Sound-System and the Origin of the Uyghur Script", *JA* 269, 1981, 353以下を参照。

(28) この種の例外は F. W. Thomas and L. Giles, "A Tibeto-Chinese Word-and-Phrase Book", *BSOAS* 12, 3-4, 1948, 753-769, にも散見されるが, 中国語の部分の再構が不確実なので, 同列に論ずることはできない。またブラーフミー文字で書かれた羅什訳金剛般若に四等の「洗」が *śi* と書かれている例は *sī* の誤植 (F. W. Thomas, "A Buddhist Chinese Text in Brāhmī Script", *ZDMG* 91, 1937, 43)。

(29) F. W. Thomas and S. Konow, "Two Medieval Documents from Tun-Huang", *Oslo Etnografiske Museums Skrifter* 3, 1929, 147, fn.7; G. Clauson, "The Geographical Names in the Staël-Holstein Scroll", *JRAS* 1931, 303; S. Konow, "Khotanese Text of the Staël-Holstein scroll", *Acta Orientalia* 20, 1948, 137; H. W. Bailey, "The Staël-Holstein Miscellany", *Asia Major*, n.s., 1951, 12; J. Hamilton,

“Autour du manuscrit Staël-Holstein”, *TP* 46, 1958, 122; Bailey, *Saka Documents Text Volume*, 1968, 112; Hamilton, “Nasales instables en turc khotanais du Xe siècle”, *BSOAS* 40.3, 1977, 518.

(30) 「韻鏡」では状母（破擦音）と禅母（摩擦音）の区別が失なわれたため、この「壽」の字の位置に関して混乱を示す（内転第三十七開）。Pulleyblank, *Asia Major*, n.s. 15.2, 1970, 222以下参照。

(31) 一般には有声の系列が無声の系列に合流したと考えられる（羅前掲書 ix, 27）。Pulleyblank, *Asia Major*, n.s. 15.2, 1970, 211はこれとは異なった解釈をする。「壽」の字は実際チベット文字による漢訳阿弥陀經に shi'u と書かれている（F. W. Thomas and G. Clauson, “A second Chinese Buddhist text in Tibetan characters”, *JRAS* 1927, 284, 305）；羅前掲書21, Bailey, *KT* 4.59も参照。

(32) 北狄及び西方の諸民族に対する一般的呼称としての「胡」については、那波利貞『内藤博士還曆祝賀支那学論叢』1926, 475-542, 以来諸説あり、Hulsewé, *China in Central Asia*, 80, n.71 にまとめられている。唐代においては、稀にはチベットの部族、ペルシア、アラブ人、更にはインド方面まで「胡」と称した（石田幹之助『胡旋舞』小考、『長安の春』平凡社東洋文庫版27）が、特に「ソグド人」を指したことがあるのも事実である（石田前掲論文；Pulleyblank, “A Sogdian Colony in Inner Mongolia”, *TP* 41, 1952, 318以下）。

この語に関連して、チベット語における「ソグド人」の呼称の問題にここで触れる必要がある。ペリオ収集P.T.1263 (=Pelliot chinois 2762; *Choix de documents II*, pl. 525; Pelliot, “Les noms tibétains des Tou-yu-houen et des Ouigours”, *JA* ser.10, v.20, 1912, 522, 同 *Histoire ancienne du Tibet*, Paris 1961, 143及び G. Uray, “The Old

Tibetan Sources of the History of Central Asia up to 751 AD.: A Survey”, in J.Harmatta (ed.) *Prolegomena to the Sources on the History of Pre-Islamic Central Asia*, Budapest 1979, 303参照)に、チベット語 sog-po が「胡」という注を与えられているからである。このチベット語の単語については既にしばしば論ぜられている。一般の辞書が sog-po に与える意味は「モンゴル人」だが、H. Hoffmann, “The Tibetan Names of the Saka and the Sogdians”, *Asiatische Studien* 25, 1971, 440-443は、13世紀以後この語が「西方のイスラム教徒」を意味する例があることを指摘した。しかしここで問題になるのは、それ以前に唐代において sog が民族名として用いられている事柄である。すなわち、古代チベット語「年代記」は、694年に Mgar Stu-gu (有名な Mgar 一家の一人) を捕虜にした sog-dag に言及する (IO 750.66, *Choix de documents II*, pl.583; J.Bacot/F.W.Thomas/Ch. Toussaint, *Documents de Touen-Houang relatifs à l'histoire du Tibet* (DTH), Paris 1940, 17(45) に転写, 38及び fn.2 に “les Mongols” (Bacot) と訳す)。同じく「年代記」には 'brog-sog (IO 750, 253, 256, *Choix de documents II*, pl.591; *DTH* 26(97), 27(98)に転写, 52に “des pasteurs mongols, les nomades mongols” (Bacot) と訳; 及び Or. 8212. 187.8, 11, *Choix de documents II*, pl.592; *DTH* 55, 56に転写, 62, 63に Thomas は “Nomad Sog” と訳し, 68に “Mongols” ではないが “Sogdians” でもない, と注)。また「コータン仏教年代記」は、500人の Sog-dag 商人について物語る (89, 92, 93, 94 [bis], 96行, *Choix de documents I*, pl.245; Thomas, *Tibetan Literary Texts* 1.319-320; Emmerick, *Tibetan Texts* 88-89及び106b “Sogdian”)。

最初にあげたP.T.1263の sog-po と「胡」及び「年代記」の sog-dag は、Li Fang-Kuei, “Notes on Tibetan sog”, *CAJ* 3, 1957-8, 139-142 によって論ぜられ、Bacot と Thomas の訳に反対して sog = “the Sogdians” とする説が打ち出された。これを更に進めたのが G. Uray,

“The four horns of Tibet according to the Royal Annals”, *Acta Orientalia Hungarica* 10, 1960, 47, fn. 34 で, -dag は複数語尾ではなく本来の語の一部である, とされた。Uray は Sog-dag = Skt. *sogdaka-(?) <Sogd. swr̥dyk とするが, そのようなサンスクリット語形は発見されていない。佐藤長『古代チベット史研究』上, 1958, 355以下も Li 論文に言及して sog-dag を「ソグド人」とする。R. A. Stein, *Tibetan Civilization*, Stanford 1972, (もとのフランス語版1962), 34も同様の立場をとった。これに対して Hoffmann 前掲論文440-455は, Uray に対立して「ソグド」人説に懐疑的で, むしろこの語を複数語尾 -dag を伴った “Saka” と理解しようとした。Uray, “The Old Tibetan Sources” (前掲) 282は, Hoffmann に反対して自説を擁護した。

Hoffmann を除いて現在ではほとんどのチベット学者が, sog-dag の解釈については Uray と一致しているように思われる。佐藤前掲書が既に言及している Orkhon Turkic *soydaq* (Kül Tigin E3139, 及び Tonyukuk II S 2; T. Tekin, *A Grammar of Orkhon Turkic*, Bloomington 1968, 369参照) の存在がこの説に有力な根拠を与えるだろう (森安孝夫「吐蕃の中央アジア進出」, 『金沢大学文学部論集・史学科篇』4, 1984, 20 及び注98, 101参照)。チベット語の sog のみの形は, 当然 -dag の部分がチベット語内部で複数語尾と解釈されて脱落したものと考えられる。こうして我々は, “Sogdian” を意味する単語のリストに更に一語加えることができるのである。

(補注) 本稿校正中 H.W. Bailey, *Indo-Scythian Studies, Being Khotanese Texts Volume VII*, Cambridge 1985, が出版された。この書物はコータン語テキスト中に現れる諸民族名をイラン語源で解こうとするもので, 本稿で扱ったものでは *dūm* (p.16f.), *Kāshghār* (p.50f.), *sālī* (p.76ff.), *cahā:spata* (p.87) 等が論ぜられている (1985. 4. 8)。